

---

# 馬槍と兵劍

坂本伊能

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬槍と兵剣

### 【Zマーク】

Z3869F

### 【作者名】

坂本伊能

### 【あらすじ】

戦争の一幕。出撃を命じられた騎馬軍団が、重装歩兵師団の一連隊と遭遇戦に陥る。

夕日が沈みかけていた。

眩く大地を照らしていた太陽が紅に染まるごと、大地にも紅が差していく。

紅に染まる木。草。人。土。

だがどす黒く変色してしまった紅は、血であった。

北、小高い丘の上に駆け上った鉄甲騎馬軍団。

南、騎馬軍団によつて散々に散らされた重装歩兵師団。

大地に横たわる死体の多くは甲冑を身に纏つた歩兵だつた。  
であるから、一見するとこの戦は騎馬軍団が勝利した様に思える。  
だが、違う。

騎馬軍団は数百。対して歩兵師団は五千を超えていた。

突破されたのではなく、突破を許した格好だつた。

騎馬軍団が突撃して来たのを見計らい、重装歩兵師団は素早く割れようとしたのだ。

しかし重装が邪魔し、真つ一つに分かれるまでには時間が掛かつてしまい、そこを騎馬軍団に蹴散らされた。

重装歩兵師団も横から槍を突き出させ、騎馬軍団の幾らかを討ち取つていた。

数で言えば騎馬軍団の勝ちだったが、割合からすれば痛み分けであった。

「見事ツ」

騎馬軍団の先頭に立つ男が、歩兵師団の動きに賞賛を捧げた。

兜を被つた中年の男だ。茶色と白髪が混ざつた髪を撫でつけ、口髭を蓄えている。

馬に乗つてゐるだけあり、巨躯と言える体格ではないが、引き締まつた体格の持ち主。

手には馬上からでも十分に歩兵を攻撃できる様、穂先に刃が作られた槍ランスを持っていた。

ヒュンシ、とその槍を払う。

槍に付着した肉塊が丘の上に飛び散つた。

「アレが大陸最強と名高い王国の重装歩兵師団。  
我が公国の騎馬軍団が、いつも容易くあしらわれるとせ

「どうされますか、閣下」

側に従つ騎兵が、将軍である男に問いかける。

「もう一度、突撃を敢行しますか」

「次にはタイミングを合わされよ。」

2つに分かれた軍団から、槍の挾撃を受け、最悪押しつぶされかねぬ。

そうなれば、2度とあの軍団を突き抜ける事はできまい

「では撤退されますか。

あの重装備では、我が騎馬軍団にはとてもではありませんが、追いつきますまい」

「戻れぬ。戻れば味方に恥知らずと罵られよ。」

城門の前で敵の前に佇み、矢の的となるつもりか？」

「では」

槍を上げ、將軍は騎兵の言葉を遮つた。

「三矢の陣を取る。

如何に用兵が俊敏であれ、あの機動力で瞬時に4つに分かれる事は不可能だ。

陣が潰れたところに再度突撃する」

「承知」

騎兵達が兜を被り直し、手に持つ槍を構えた。突撃の構え。それは敵にも伝わつただろう。

ザワザワとしていた敵陣が、ピンと張りつめ、そこから1人の男が姿を現した。

巨躯。身長は人並みだったが、肩幅が常人のそれより一回り広い為、そう思はされる。

黒髪を長く伸ばし、後ろでくくっている。離れていても視線を感じる事ができる程の、鋭い目つきの若者だった。

重装歩兵にしては随分と軽装だ。周囲が、顔全てを覆う兜、隙無く全身を包み込んでいる甲冑、長さ6mはあるつかといつ長槍を携えているのに、彼だけは革鎧姿。

籠手をはめ、1mを優に超える大剣を所持していなければ、重装とも呼べなかつただろう。

だがその装いの違いが、明らかに格の違いを物語つていた。  
重装歩兵師団という中で軽装が許される身分。

「待たれい！ 我は、王国の第1重装歩兵師団第2連隊を率いる隊長である。」

若者こそが、敵将だつた。

あの首を取ればこの戦の勝利である。

槍を持つ手が、握りしめられる。

「公国騎馬軍団將軍殿に申し上げる。」

降伏せよ。」

告げられる降伏勧告。

確かに両者は遭遇戦に陥り、停戦や降伏の意思の有無を確認していなかつた。

しかし一度戦闘が始まつて、訊く事ではなかつた。

將軍が、1歩前に進み出て声を張り上げる。

「降伏してどうなると言つのか。

捕虜となつた者に何の安息があるのか。

あつたとして、それが祖国を売る程の安息なのか。

我々は降伏を拒否する

「であるならば、一譲討ちを申し込みたい。」

「なんと」

若者の言葉に、両軍がざわめいた。

この状況で何を言い出すのか、と人々に叫んでいた。

「我等は貴公の首を討ち取る自信がある。」

しかし、それは貴公とて同じであるとお見受けした。

であるならば、誰よりもその自信が確かである者同士が、己が力を示すべきではないか

「正氣か。貴公の自信は、その五千の軍勢によるモノではないのか」

「五千は軍勢を潰す為のモノ。

貴公の首であれば、我の手でも十分。そしてそれは貴公とて同じ筈

「五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>は<sup>は</sup>軍<sup>ぐん</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>潰<sup>つぶ</sup>す<sup>す</sup>為<sup>め</sup>の<sup>の</sup>モノ<sup>。</sup>

騎兵が馬を寄せて、將軍を抑えようとした。

だが將軍はその馬を何ともせず、むじろ血<sup>みじろ</sup>のりの馬から下りて、丘を下って行つた。

「後悔しても遅いぞ

「後悔あればこゝの人生。  
するからこそ人は生きる事を尊ぶ

「五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>は<sup>は</sup>軍<sup>ぐん</sup>勢<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>潰<sup>つぶ</sup>す<sup>す</sup>為<sup>め</sup>の<sup>の</sup>モノ<sup>。</sup>

將軍が、槍を突き出した。若者は剣の腹で受け、流す。

そのまま滑らせて距離を詰める若者。待つていたとばかりに、將軍は拳を突き出し、若者の顔を殴り飛ばした。

ようめく若者、そこを狙い、將軍が再度刺突を放つ。  
だが僅かに持ち上げた大剣の切つ先で、刺突の軌道が変えられた。

勢いをそのまま別の方向へ向けられた為に、今度は將軍の方が体勢

を崩した。

將軍は咄嗟に重心を据えた。腰を落としたのだ。

そこへ、若者は体を大剣に押し当て、体当たりを喰らわす。隙を突きたかつたが、若者も体当たりを繰り出す為の体勢に移るのに時間が掛かり、完全な奇襲とはならなかつた。

まともにぶつかり合えば、軽装の若者と甲冑姿の將軍とでは、ウエイトが違い過ぎた。体当たりは大した威力ではなく、互いに武器を押し合う格好で迫り合いになる。

「ハアツ！」

「ゼヤアアツ！」

互いの一喝。武器が弾き合い、互いに距離を開けた。だがすぐに両方が踏み込み、距離を再び縮める。

両者共に思い切り武器を振りかぶる。

若者は薙ぎ払い。僅かに刃を跳ねさせた後、振り抜く。

將軍は上からの突き下ろし。腕を自一杯引き、上体を反らして、体重を乗せる。

互いの渾身の一撃を放つた。

ガアアアーンツー！

凄まじい金属音。弾かれたのは、  
槍だった。

振り回せる程度に軽量の槍は、柄は木製である事が多い。しかし、

大剣は全てが鉄だ。

ウェイトで負ける事は至極自然な事だ。槍は空中を舞う。

だが大剣は、思い切り振り抜かれたが為に遠心力と衝撃に若者が耐えられず、手を離して、重装歩兵師団の中へと放り込まれた。

互いが丸腰になった。それでも若者は、将軍に殴りかかるうつし、地を駆ける。

「嘗めるなアツ！」

突き出された若者の右腕を絡め取り、将軍は、若者の頭を引っ掴んだ。

互いの籠手が可動可能限度一杯に折れ曲がり、関節を固定する。両者共に身動きが取れなくなる。となれば勝負を決するのは、逆の腕。若者の左腕は自由。だが攻撃に出られない。将軍の右腕は、若者の頭を掴んで離さない。

そして、将軍は右腕で思い切り頭を叩き付けた。  
ゴシヤッ、と潰れる音。若者の拳から力が抜け、横たわった。

「儂の勝ちじやな」

将軍は若者を見下ろしながら、手を振り上げた。

下ろす。同時に、騎馬軍団が丘を駆け下りて、重装歩兵師団を蹴散らし始める。

喚声、轟音に混じり、ヒュンヒュンと風を切る音。それが将軍に近付いて来る。

パシイツ

手に取る。空中に舞っていた箒の、槍だった。  
打ち合いになつた時、武器のウェイトで弾かれる事はわかっていた  
為、真上に飛ぶ様にと調整していたのだ。

ただ力ばかりでぶつかる事しか知らない若者は全力を出し切り、調整した將軍の力ですら受け止めきれず剣を手放したが。

或いは、兜の差か。

兜は極端に視界を狭める。本能的にこれを嫌い、兜を装着しない人間も少なくない。

だが、狭まつた視界を持つからこそ、思考の点で見えてくる事も出てくる。

その点で若者は劣っていたのかも知れない。身体能力だけならば、甲冑を着込んだ将軍とすらも互角だったのだから。

「戦いの年季が違うのだ」

言い捨て、將軍は槍を構える。

そして、兜を被らなかつた男の頭に、槍を突き立てたのだった。

(後書き)

ストーリーはありません。  
戦争の一場面を切り取った感じになっています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3869f/>

---

馬槍と兵剣

2010年10月10日13時46分発行